

本は秘蔵させた。弘川寺には西行の墓が伝えられてをり、似雲がそれを探りあてたことになつてゐる。

涌蓮には、歌を書きとめる周囲があり、似雲にはそれがなかつたからだだけでは、すまされない相違である。

手もとに、似雲の懐紙もの一幅、短冊の台張一幅があり、涌蓮の懐紙三幅あることは前記の如くである。私の癖で、まとめようとする場合、季節向きの作者のものがあれば、それを床にかけたりするのであるが、似雲の幅は、私にはどうもかけて親しめる書体ではない。

涌蓮の場合「涌蓮家集」が「獅子巖和歌集」の補遺となる如く、似雲の場合も「としなみ草」の補遺となるものがあり、これは「としなみ草」の稿本といへるものであるので別稿にしようと思つてゐる。それには涌蓮の方をさきにといふ気持が、本稿である。

「獅子巖和歌集」千七首に、二百十一首を加へ得る「涌蓮家集」は、明らかに上下二巻の下にあたるものである。その上巻にめぐりあへる日があるかも知れない。その時は、上下二巻の全てを活字にしてみたい。

その場合、もし私が部立にしたものを附載するとすれば、秋三十一首・冬二十八首・恋七十二首・雑百三十六首で、そのうちで「獅子巖和歌集」と重るのは、秋五首・冬九首・恋二十四首・雑十八首である。

冷泉殿あるとき途中に涌蓮を御覽ありて西行によくにたりと
仰ければ

263 西行に杖と笠とは似たれとも心はゆきと墨染のそて

涌蓮子盜賊にあはれし時

264 ぬすまれしと思ふ心もはつかしゝすてゝすむ身のもとを忘て

自画賛

265 捨しそのはしめの心いまはなしこけの心は身をいかにせん

虚仮仏語名聞ノコナリ

266 としきむくくれゆくまゝに故里のおやの起居をおもひこそやれ

伊勢 涌蓮

或隠士のかりにてあるしひめ置ける香盒を炉中へおとしけ

ふりたちのほりける氣のとくなるまゝに

267 もしほやくいせをのあまのわざなれはふたみのうらにけふりたて
つる

となつてゐる。

266 は「獅子巖和歌集」の 653 (大系本六二二頁・木板本三十七ウ) で

おなしころ古さとへ文つかはすとて

653 とし寒くくるゝにつけて古さとの老たる親のたち居をそ思ふ

となつてゐる。この『追加書』が美楯によつてなされたものか、美

楯以前のものは不明である。

美楯の編でなく、筆写としても、263 については問題がある。

それは「近世崎人伝」に似雲の歌として、ほとんど同一の歌があ
る。

僧似雲、始の名は如雲、安芸の国広島の人なり。歌を好み都に
のほりて、儀同三司実陰公に学ぶ。後ゆゑありて参ら
ずなりぬるとぞ。名山霊地こゝか
しこにあそび、住所を定めざれば、世に今西行といへるを聞て、

自も

西行に姿計は似たれども心は雪と墨染の袖

と戯れける。

(岩波文庫本)

——『杖と笠とは』と『姿計は』とちがつてゐるだけである。こん
な歌は、涌蓮のためにも似雲のためにも、伝へられない方がよい歌
だと私は思ふ。しかし、記憶しやすいといふ点から伝へられて、作
者があちらにつき、こちらにつくのであらう。

「崎人伝」は伴蒿蹊著であつて、似雲はその巻四にあり、涌蓮は
巻三にある。蒿蹊は、この一首を似雲として扱つてゐる。

それに対して、美楯はこれを涌蓮としてゐる。美楯は「崎人伝」
をみなかつたのだらうか。みても、これが涌蓮作と信じたのであら
うか。美楯が「崎人伝」に従ふならこの『追加書』のところに、何と
かあつて然るべきであらう。

「歌林一枝」も似雲・涌蓮を入れてゐるがこれは「崎人伝」のぬ
き書きといつてよいであらう。

似雲と涌蓮は、それほど同類にとられてゐたのだらうか。

矢部直の言は、自作の歌を自らかきとめることをしなかつたのが
涌蓮である。

似雲は、生涯の歌を整理して「としなみ草」として、弘川寺に納
めた。しかも、副本を作つて、そちらを見せることを指示して、原

197 おとろかすあらしのかねの声々にこのあかつきの夢もさめけり
 198 おとろけはきのふも夢とうつり来てまたあかつきのかねひくくな
 り

199 秋のよをなかしとなにゝたのみけん月にむかへはあけやすき空

擣衣

200 秋かせに聞も夜さむの唐衣うつおとしきるしつか山もと

201 風さむみたかいねかてのおもひよりみやこの月に衣うつらん

霧

202 谷の戸はそこともみえぬ夕きりにねくらやまとふ秋のむらとり

暮秋

203 けふのみとしたふにつけて秋の日のいとゝほとなくくれいそくら
 し

204 ゆふへく置ならひたる袖のつゆあきはすくともかたみならまし

——この197が「獅子巖和歌集」の798（大系本六三七頁・木板本四十五ウ）
 で第五句『さめけれ』である。200は479（大系本六〇三頁・木板本二十七ウ）
 203は530（大系本六〇八頁・木板本三十一オ）である。この並びでみ

ると197 203に為村の点があつても不自然ではない。

219は「獅子巖和歌集」の687で、これは大系本の題の誤りの処であ
 げた歌で第一句『たのみしは』である。

244と261は

関

243 暮かけて清見関を過行はつきに心のとまるなりけり

244 板ひさしあれ社まされふはの関月もしくれももるに任て

田家

261 賤かやの門田のいなはあきかせになひくをみればほに出にけり

262 しめしよりいくかもなきに丈夫の小田もる庵の、、、、、

で、244は804（大系本六三八頁・木板本四十五ウ）で、『残月越関』の題、

261は854（大系本六四三頁・木板本四十八オ）で、それぞれに為村の点があつても不自然ではない。さうみれば、無点六首の問題は解消する。

のこるのは266で、これについては後記する。

「涌蓮家集」の「獅子巖和歌集」と同じ五十六首が、部類からみて、秋以下冬恋雑であつて、春夏がないのは、五十六首だけではなく、「涌蓮家集」二百六十七首もまたさうである。

たとへば、11 12 13は『鶯声万春友』、205 206 207は『松有春色』、231 232は『春懐旧』であるが、『松有春色』は『六十賀』であり、『春懐旧』は『為綱卿三十三回御忌』であつて、春に入るのではない。『鶯声万春友』も賀に入れ得る。

このことから、「涌蓮家集」は上下二巻であつたらうといふ推定となる。その上巻と下巻とが離れて、下巻が本稿でとりあげてゐるものであらうか。

もし上巻があれば、序もあるかもしれない。序があれば「涌蓮家集」の編者も判明するかもしれない。

跋はなかつた。そのことは、巻末が

追加書

たを得てすら世にはなきたからとも、いつくめるをかくおほくもにへさにもつとへはたまやすくよつの時何と題をさへにわかちて世にも広くなしませる吉田ぬしの御こゝろとりそへいとたふとくたれの人かめてさらむやよろこはさらむやといふことをかくいふは聴雨庵蓮阿

とある。これをひけば、編者は吉田元長とみることが出来る。

右の序跋ではうかんで来ないが、涌蓮の歌を多くかきとめてゐたむきのあることが推測出来る材料がある。

「涌蓮集 贈答部」がそれで、これは玄仲（芦庵）・正子・物外・資芳（蒿蹊）・直・為村・周尹・光昌・道敏（一室）・良泰・慧静・

松月などとの涌蓮の贈答歌をあつめたもので、玄仲との場合が主である。これに矢部直が序で

涌蓮上人は哥よみて物にかきをくことなくやつかれ直か物忘れぬを幸ひとてそのよめりしことに口つからすしてさしめり千哥にも及ぬへし拙き手してかきつめしかは人にしめしかたし更に写しあつめて涌蓮集とせんとすけふたま／＼心まめならて引籠ぬつれ／＼をなくさめて上人の上とよみかはせる哥のみいさゝか書つく若みんことを望む人あらはかして惜むことなけむ見む人とくみてとくかへすへし

天明二年^{手實}十二月廿五日

矢部 直

といつてゐる。直の手もとには、涌蓮口授の資料があり、少くとも「贈答部」をその中からぬき出して編してゐることになる。

この矢部直を「獅子巖和歌集」の藤井維済の序の『うちきくま』

にかいつけたる人』にあて得る証左はない。しかし、吉田元長以外にも推測を求め得る資料にはなるであらう。

「涌蓮家集」と「獅子巖和歌集」との資料の関連の有無は想像の域を出ない。吉田元長が「涌蓮家集」をも手にしたとすれば、「獅子巖和歌集」の歌数は増したらうといふ想定がゆるされるとすれば、「獅子巖和歌集」の資料は、「涌蓮家集」以外の為村の点をもつ歌の方を集めたものといふことになる。その場合「獅子巖和歌集」にあつて「涌蓮家集」で為村の点のない六首は、美楯か又はもう一つ前の段階でつけ落したとみなければならぬ。

「獅子巖和歌集」の総歌数は千七首である、この中には他歌とみるべきものもあるが、詞書に入れてなく本行に並べてあるのが千七首であるから、一応千七首でみてゆく。

「涌蓮家集」の総歌数は二百六十七首である。この中から「獅子巖和歌集」と一致する歌を五十六首あげることが出来る。

この五十六首をみると、秋五首・冬九首・恋二十四首・雑十八首である。

五十六首中で為村の点のみえない六首は、197・203・219・244・261・266である。197 203の前後を示すと

初 雪

195 くれ竹の一夜のほとに降はれてなひくさえたの雪もめつらし
196 夜もすからさえし嵐の柴のとをあけておとろくけさのはつ雪

暁

と、詠草懷紙そのままの並びであり、なほされた『ちかき』によつてゐる。

以上、懷紙の三例から次のことがいへる。

「獅子巖和歌集」は為村の点のある歌だけをとつてゐて、歌句も加朱に従つてゐる。

それに対して、「涌蓮家集」は点のない歌もとつてゐる。

このことから、「涌蓮家集」は「獅子巖和歌集」への補遺の資料となる。

「涌蓮家集」の為村の点のあるのは、百首で、そのうち「獅子巖和歌集」所収歌は五十首で、五十首はみえない歌である。また点のないのは百六十七首で、そのうちの六首が「獅子巖和歌集」所収である。

これを合せると、「涌蓮家集」の二百六十七首のうち五十六首が「獅子巖和歌集」にみえる歌である。従つて、二百十一首が補遺となる。

「涌蓮家集」は、編者は不明である。美楯の筆であることはわかるが、編者と定めるわけにゆかない。

「獅子巖和歌集」の編者も同様で、きめることは出来ない。この場合、何を資料としたかの問題もからんでくる。

「獅子巖和歌集」の序は

涌蓮上人は伊勢の人なりけるか嵯峨のやま陰に柴の庵しめて念仏三昧にてそありけるわかゝりし世には言葉のみちにもこゝろさ

しふかゝりしかはをりにふれことにつきてのよめりし哥すくなからずされと世に聞えむともなからむ後にとゞまれともおもふころやあらさりけん一首たにしるしおけるともなかりしを明くれかたらふ友とちのなかにうちきくまゝにかいつけたる人ありていつしかひと巻の集をなせりすめる庵の名をもてやがて獅子巖集といふなる安永みつのとし上人身まかりしのは其集いつこにありとも聞えさりしに此ころ吉田元長さかのわたりにもとめ出て後の世にもつたへむとてあつさにゑらせてけりされは上人のこの葉も世とゞもにちりうせさらましとしたしかりし身にはいとうれしくこそ

文化五年文月

藤井維濟識

とある。これによれば、編者を吉田元長とする説はとれなくなる。編者は『明くれかたらふ友とちのなかにうちきくまゝにかいつけたる人ありていつしかひと巻の集をなせり』とあるのに従へば、それが編者で、吉田元長は板行といふことになる。

しかし、「獅子巖和歌集」には蓮阿の跋があつて、それには

獅子巖の大とこのこときにこりなきこゝろより読出たまへる歌はしもむなしきおほ空を春の霞秋のきりなどのたなひきてあやをなせるかことく月花はさらにて何くれのけうにふれくさゝのえによりては風情を色とれるものからさらに其かたちなしとそされは一首よみ得ては仏のみかたつくれるにもはた真言をとなふるにもおなしとなむいへりけるさてこそは哥によりてうへなき法をうるとも聞えけるひしりもおはしけれあはれくこの大徳のひとり

夜のほとに咲そふはなのいろなれやそなたの峯のけさの白雲

言の葉の道の手向に数ならぬ身にはつかしきはなの下庵

これは「獅子巖和歌集」春に所収で、122 123である（大系本五五八頁・木板本六ウ）。題は『花』になつてゐる。『朝花』は別に148『朝日さす』（大系本五六二頁・木板本八ウ）がある。

次に、

冬 夜

涌蓮上

ねられねは又起いてうつみ火にむかふとすれとあけぬ冬のよ

いく度かゆめを覚して冬の夜はやま風さそふあられをそきく

この二首は、「獅子巖和歌集」には不載である。美楯筆の「涌蓮家集」にあつて

冬 夜

139ねられねは又おきいてうつみ火にむかふとすれとあけぬ冬の夜

140幾たひか夢をさまして冬のよはやまかせさそふあられをそきく

と二首並べてある。これで注意すべきは、点のない139も並べてあることである。

第三の幅は

恨 恋 改作

涌蓮上

人よしれ筆に書やることのはもおもふうらみの数はつくさす

かすく／＼にうらみても猶かひやなきつれなき人のおもひしらすは

暁

在明のつき静かなるしはの戸にとをき野寺のかねそきこゆる

しつかなるあかつきことこのころこそ浮世の夢も思ひしらるれ

『獅子巖和歌集』は『恨』で、点のある『人よしれ』が668で入つてゐる（大系本六二三頁・木板本三十八ウ）。

恨

667つれなくは思ひ捨て末つひに身ながら身をも恨みられけり

668人よしれ筆にかきやる言の葉も思ふ恨のかすはつくさす

これは木板本であるが、これを大系本は『捨てなで』『思ふ恨みの』『尽さず』とかへてゐる。

『暁』の方は

793おとろかす嵐のかねの声々に此あかつきの夢もさめけれ

794有明の月しつかなる柴の戸にちかき野寺の鐘を聞ゆる

795閨の戸の明る光も程そなきまくらに鳥の声ぞ教そふ

といふ並べ方で、点をもつ『在明の』が出てゐる（大系本六三七頁・木板本四十五ウ）。詠草懐紙の『とをき』を『ちかき』となはされた方をとつてゐる。

これを「涌蓮家集」は

恨 恋

238人よしれ筆に書やることのはもおもふうらみのかすはつくさす

239かすく／＼に恨ても猶かひやなきつれなき人のおもひしらすは

暁

240ありあけの月しつかなるしはのとにちかきてらのかねそきこゆる

る

241しつかなるあかつきことこのころこそうきよの夢もおもひしらる

れ

大系の『例言』は、「獅子巖和歌集」は文化五年板をとつたとしてゐるが、文化五年は藤井維済の序の日附であつて、刊記のあるものでは、文化十三年より早いものは「国書總目録」にもみえない。「近世京都出版資料」の『板行御赦免書目』は、文化七年に『未刻』で出てゐる。

他に、右の一首さしかへの板本があるのかも知れないが、未見である。

文化十三年板とくらべると、右の如くである。

次に、大系本の『恋部』で

遇不逢恋

687 頼みこし一花染の恋ごろもまたも重ねぬなかぞはかなき

688 こえ初めし其の夜ばかりを限りにてよそになりゆく相坂の関

(六二五頁)

と、687はひとつづきであるが、木板本は『遇不逢恋』は684から687までであつて(三十八オウ)、688『こえ初めし』の題は、『遇不逢恋』ではなく『遇不逢恋』になつてゐる(三十九ウ)。

漢字と仮名は、大系本は木板本を無視して改変してゐる。木板本の誤読もある。

また木板本は蓮阿の跋一丁があるが、大系本は跋の全文を落してゐる。

「以文会筆記」によると、『有明の』は自画賛があつて、涌蓮の自讃歌ともみられる。

右諸点から、本来なら木板本で記述する方が正確であるが、一般

の伝達のために大系本を使用するのである。その際、大系本の二首脱落を補つた歌番にしたがつて記述する。

「涌蓮家集」は福田美楯の筆である。大きな字でゆつたりと書いてゐる。半紙本墨付四十丁である。長方形の『福田氏蔵書』の朱印が第一丁の右下方にある。初丁を示すと

七十賀
心静延寿 法金剛院大千和尚

1 老らくのこむよもしらしのりのしのことろつねなるむろのとほそは

2 しつかなる心につれてのりのためなほなからへむ末もたのものし

3 千とせへんまつをむかしの友そともこゝろつねなる人やみるらん

寄道祝

「一オ

4 すなほなる心をたねと幾世々に猶つきせぬはことのはのみち

5 和歌のうらに光をそふる玉ほこのみちある御代をあふかさらめや

6 あふけなほ神のまもりのあれはこそよに敷しまのみちはさかゆれ

肥後守平勝盛朝臣玄番頭還任ありしを賀し侍りて

7 暫しこそよそにうえしかくらるやま

「一ウ

半丁九行といつた大字である。題を一行、歌を二行にかいてゐる。半紙本四十丁で、総歌数は二百六十七首ある。

大部分は冷泉為村に教へを乞うた詠草から集めたもので、百首に点がある。

涌蓮の詠草懐紙ものが、手もとに三幅ある。一つは

朝 花

達 空 上

涌蓮

熊谷武至

福田美楯筆の「涌蓮家集」が、その冷泉門の具体例を示すとともに、「獅子巖和歌集」の補遺の資料たることを記述するのが、本稿の目的である。

「獅子巖和歌集」は、読者の便をはかつて「国歌大系第十七巻近代諸家集三」を使用するのであるが、あらかじめこの活字本の誤謬と不備を明かにしておきたい。

刊記『文化十三^{丙子}年仲夏』の木板本と照合してゆくと、大系本は

旅泊春雨

101かぢ枕明けても晴れぬ春雨に苦ふきながらこぎや出づらむ

(五五六頁)

の次の102にあたる

春駒

若草の春の野かひの放れ駒ゆくもとまるもおのかまゝなる(五ウ)の一首を落してゐる。

大系本の『秋部』の

岸紅葉

1

522一木をも二木に見せて影うかぶ水のきしねに染むるもみち葉の次に、木板本では

月前紅葉

有明の月しつかなる庭のおもにをり／＼落る木の葉をそぎく

(三十ウ)

がある。しかし、この一首は『月前紅葉』の題にそはない。そのためであらうか、大系本は『冬部』の

落葉

57夕まぐれ木の葉の脆く散るおとにおもひぞあへぬ袖ぞしぐる、

(六一〇頁)

の次に、木板本の『月前紅葉』の題を『月前落葉』にかへて558として『有明の』を入れてゐる(六一一頁)。ここに一首を入れるために、木板本の

落葉

558更にまた梢の外の一しほをおち葉の庭の霜やそむらむ(三十三オ)を除去してゐる。